

「私はいつも子どもたちに助けられている」。 一人の学びをみんなの学びに広げ、 一人ひとりの「ゴール」に向かわせる 「想い」とは？



佐藤幸江
神奈川県横浜市立
大口台小学校教諭

「メディア創造力」の育成を主目標に掲げた、新生「D-project（デジタル表現研究会）」の今月は、横浜市立大口台小学校の佐藤幸江先生が登場。絵本を使った劇『おひさまパン』をひらくよ！（1年生）の授業を紹介する。「一人ひとりの違いを大切に、それぞれのゴールに向かわせたい」。佐藤先生のさまざまな「想い」や「理念」が、この実践には込められていた。

導入

意欲を刺激し、目的意識と相手意識を明確に。

子どもが食いつき、夢中で取り組める導入を工夫



▲「PISA型の読解力が話題になっていますが、絵本は『非連続型のテキスト』。それを『連続型のテキスト』に解釈しなおす過程で、子どもたちの創造力や独創性も育まれると思います。そのためにメディア機器の力を借りました」
絵本：「おひさまパン」エリサ・クレヴェン／作・絵
江國 香織／訳（金の星社）より

「わずかな文章と数枚の挿絵で構成される絵本は、想像を働かせる余地も大きい。挿絵を観察し、行間を読んで、絵本には描かれていないセリフや動きを考える活動で、想像力や創造力を養い、独創性を芽生えさせたい。そして自分の思いを上手に伝える力を身につけるのが、この授業のねらいです」

絵本『おひさまパン』に登場する動物たちの気持ちや動きを想像し、動物のお面とセリフを作って劇を演じる国語科の授業。まず佐藤先生は、絵本を読み聞かせたあと、電子情報ボードに挿絵を拡大投影して、じっくり観察さ

せた。

「大きく映すことで、動物の表情や動きを細部まで読み取れ、一人ひとりが想像の材料を得られるのです」

子どもの意欲を伸ばすことも忘れない。佐藤先生は、「切実感と必要感」をととても大切にしている。

「今度の授業参観で、劇を発表しようよ。もう幼稚園生じゃない、小学1年生になったことをお家の人に見せようよ、と声をかけました。低学年ならではの『のせ方』ですね」

相手意識と目的意識も明確になり、子どもたちは意欲的に取り組み始めた。

練習

一人の学びを、みんなの学びに。

教師が基準を押し付けず、子どもの創意工夫を基準にする

▼「一人の学びを、みんなの学びに」。一人の子どもの気づきをクラス全体に広め、共有する。だがそれだけでは全員が真似するのみで、没個性になってしまう。



好きな動物を選んだ子どもたちは、グループに別れてセリフを考え、演技の練習を開始。佐藤先生は4つのめあてを示した。「セリフを覚える」「大きな声」「はっきりゆっくり」「身振り手振りなどの様子」だ。

「練習の様子をICレコーダーで録音しました。友だちが小さな声しか出ていなくても、子どもは優しいので『大きな声でした』とほめてしまうんです。録音して聞き比べることで声の大きさを客観的に評価でき、『こうすればいい

んだ』という基準に気づけました」

最も苦労したのが、「身振り手振りなどの様子」だった。

「暗記したセリフを一本調子で喋るレベルから、なかなか抜け出せませんでした。そんなとき、一人の子どもが『甘くておいしいね』と声に表情をつけたのです。すかさず『おひさまパンがとってもあま〜いということが、よくわかる言い方だね』とほめて、他の子にも気づかせました」

こんな出来事もあった。全員横一列



▲「熊さんを演じる子どもが、腕を組むジェスチャーで力強さを表現したんです。さっそくみんなに周知すると、全員が真似し始めました」。猫を演じる子も、「腕組み」ポーズを模倣。そこで佐藤先生は、「もっと猫らしいポーズがあるんじゃない？」とアドバイスした。「一人ひとりの違いを、大切にしたい。低学年は個性が出にくい年齢ですが、教師の味付け次第で個性や獨創性を伸ばせるはずですよ」

に並んでナレーションの練習をしていたグループが、「声がちゃんと出ているか」をチェックする聞き役を、列の前に配置したのだ。

『「いい練習方法だね」と認め、『あっちのグループは、あんなふうに練習しているよ』とクラス中に広めました」

これらをきっかけに、子どもたちは「様子」や練習方法を工夫し始めた。「私はいつも子どもに助けられているんですよ」と、佐藤先生は微笑む。

「こちらの想定を上回る発見や工夫を、子どもたちは自分の力で編み出してくれる。私はそれを見逃さずに認め、み

んなに広げるだけです」

「一人の学びをみんなの学びに」が、授業全般を貫く佐藤先生のポリシーだ。「当然、『こうなってほしい』という基準を私も持ってはいますが、それに縛られたり押し付けたりはしません。そして、子どもの創意工夫を取り上げてみんなに示し、それを学びの基準にします。子どもたちが自分の思いを自由に表現できる学級の雰囲気を作っておかないと、このような子どもたちの創意工夫はなかなか生まれません。どの教科でも言えることですが、まずは学級づくりが基本です」

今後

子どもの数だけ、「ゴール」はある。

教師の設定した「ゴール」を越えて、子どもは自ら走り続ける



▲参観日の発表後、隣のクラスでも音読劇を発表し、成功を取めた。が、次はあえて失敗を経験させたいという。失敗をバネに成長する教育を、佐藤先生はこれまで心がけてきた。常日頃から「学校は失敗する場所だよ」と話し、失敗を笑わない学級を作ってきたのだ。「もちろんフォローは必須。フォローが無ければ、失敗した傷が心に残るだけ。子どもが発信する場を毎日設けて発達段階を把握し、つまづくであろう箇所に先回りして失敗から立ち直す手立てを準備しなければいけません」。学年の締めくくりには、「折り紙動物園」を制作して展示し、全校生徒に見てもらおう予定だという。

参観日の発表は大成功。保護者からほめられ、子どもも大喜びしたという。「この授業で身につけさせたいと考えていたことが、もう一つあります。それは、自分の想像を広げながら友だちのイメージにも触れ、人によって感じ方が違うことを実感し、他人の良さを認め、尊重する力です」

結果、子どもたちはこの授業を通してますます仲良くなったという。お互いの良さや個性を認め合った証拠だ。

が、学びはこれがゴールではない。「図画工作の砂遊びで『おひさまパン』を作る子や、おうちで実際にパンを焼いた子も。生活科で『あさがお』を学習したとき、お日様の力を指摘する声も自然と出ました。授業が終わっても、子どもたちは自分の『ゴール』を見つけ、一人ひとりの『ゴール』に向けて走り続けているんです」

その熱意を活かす次の取り組みも、すでに考えてある。

「学級担任ですから、年間を通して子どもを育てる長期的な計画が不可欠。次は『大きなかぶ』の音読劇を2年生に発表する予定ですが、上級生から修正点を指摘されて『失敗』を実感させるのがねらいです。失敗を乗り越え、失敗を糧に成長させたいのです。『失敗は宝物』ですから」

最後に、佐藤先生はこう締めくくってくれた。

「指導書通りに授業を“流す”先生が多いですが、子どもも違えば先生の願いも違う。同じ単元、同じ教材でもアプローチ方法は変わるはず。私は毎年、子どもに合わせて学習活動を工夫しています」

佐藤先生の授業を真似るのではなく、その「想い」を読み取ってほしい。

メディア創造力 育成授業の視点

D-project会長
金沢大学教育実践総合センター
助教授 中川一史

メディア創造力とは「メディア表現学習を通して、自分なりの発想や創造性、柔軟な思考を働かせながら、自己を見つめ、きり拓いていく力」を意味します。この力を伸ばすには、まず導入で子どもが夢中になる「しかけ」が必要です。これで目的意識が明確になると、教師に「やらされているだけ」にならず、必要以上に教師が関与する必要もないので、子どもたちは創意工夫を自由に広げることができます。さらに、教師が「自己を見つめ、きり拓いていく力」をしっかりと見取ることもポイントです。メディア創造力は教科のねらいを超えて培っていくもの。予想外の子どもの行動を受けとめられるよう、教師もメディア創造力を磨く必要があります。